

マンホールデザインの歴史

日本で初めての近代的下水道は、明治14年の横浜居留地で、神奈川県御用掛(技師)の三田善太郎氏が設計を行いました。

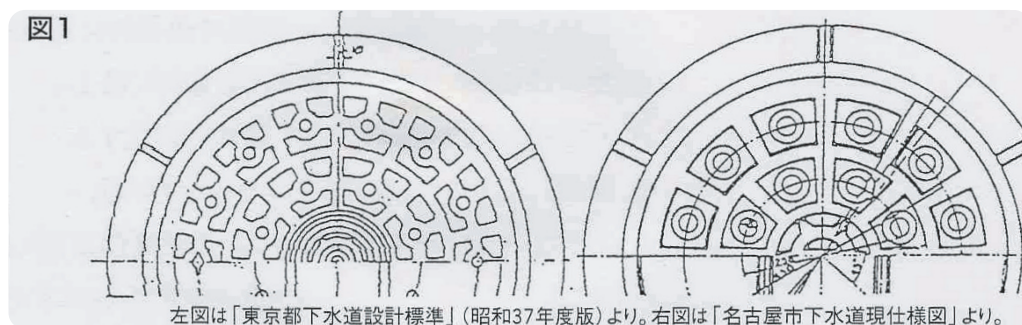
ふたについては、明治の初期のものは木製の格子ふただったとの話もありますが、铸铁製のものは、明治17～18年の神田下水(東京)の“铸铁製格子形”が最初だといわれています。

現在のような丸形のものは、明治末期から大正にかけて、西欧(主にイギリス)を参考にして製造されたと考えられています。

現在のふたの原型は、明治から大正にかけて、東大で教鞭をとると同時に、内務省の技師として、全国の上下水道を指導していた中島鋭治氏が、東京市の下水道を設計する時に西洋のマンホールを参考にしたそうです。この当時の模様が、東京型と呼ばれ、中島門下生が全国に散るとともに広まってゆき、その後昭和33年にマンホールのふたのJIS規格(JIS A 5506)が制定された時に、この模様がJIS模様になったようです。

一方、名古屋市の創設下水道の専任技師だった茂庭忠次郎氏が、その後内務省土木局に入り、全国の上下水道技術を指導した折に、名古屋型を推薦したため、名古屋型模様も全国的に広まっていきました。

(参考) 日本グランドマンホール工業会ホームページ



現在的那覇市のマンホール(魚群)

以前はデザインはさまざまなものが使用されており、昭和52年に、本市職員が現在使われている魚(魚群)のオリジナルマンホールデザインを考案しました。これが全国初のデザインとなりました。魚(魚群)のデザインにした意味は、「下水道によりきれいになった水の中で、魚たちが喜び群れ遊ぶ様」をイメージしたとのことです。

現在でも使用されているこのデザインは、昭和62年旧建設省の全国下水道マンホールデザイン審査会において、全国1100点余りの中から下水道マンホールふたデザイン20選に選定され、表彰を受けました。



新しく設置されるマンホールデザインは魚群が使われていますが、昔のデザインもまだ残っています。